

序

飛鳥の川原寺はめのうの礎石で知られた古刹である。この寺が天武天皇の飛鳥浄御原宮の西に隣接し、浄御原宮の付属寺院と判明したのはそれほど古いことではない。聖徳太子の斑鳩宮と斑鳩寺にみるように、宮に接して寺を営むことは仏教の伝来によって始まり、舒明天皇は7世紀前半、百濟大宮に大規模な百濟大寺を建立した。川原寺はその慣習が7世紀後半に受け継がれることを物語っている。後の、京内寺院の先駆といえよう。

川原寺は斉明女帝の飛鳥川原宮ゆかりの土地である。川原宮の遺構はいまだ断片的であるが、宮を寺に施入するという習わしを伝えるものとして、これまた貴重である。

川原寺の発掘は1957年に始まる。奈良県民の悲願であった吉野川導水のルート選定の事前調査として当研究所の前身、奈良国立文化財研究所が実施したものであり、これによって一塔二金堂という特異な伽藍配置が明らかとなり、古代寺院の変遷を語る上で欠くことのできない存在となった。そして旧伽藍は史跡に指定され、保存整備の途が計られてきた。

近年、奈良県は寺域北限付近の公園化を計画し、予定地の発掘調査を当研究所に委託された。調査の詳細は本書を見ていただくとして、発見遺構は寺域の北を画す塀跡や鉄釜の铸造遺構、瓦窯、それに川原寺造営以前の遺構など多彩である。

今回発見した寺域北限の塀は、これまで不詳であった川原寺の規模・寺域を確定する上で重要であり、浴室用の湯釜の可能性のある鉄釜は僧侶の生活を偲ぶよすがとなろう。そしてなにより、寺域の周縁には寺院の営みを解く鍵がひそむことを明らかにしたことは大きな成果といえる。

こうした成果を得られたのは、調査を依頼された奈良県風致保全課、調査の遂行に御協力をいただいた奈良県教育委員会、明日香村教育委員会をはじめとする多くの方々のご支援の賜物である。

この機会に、あらためてお礼を申し上げたい。

2004年3月

独立行政法人文化財研究所

奈良文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部長

金子裕之